

ザック

重い荷に耐えなければ自律して長期の山に入ることはできない。家財道具、食料一切を背負っているからどこへでも移動できる自由を得られる反面、その重さは行動を束縛する足(背)かせともなる。それでは中世の大型で強力な甲冑を身につけた騎士のように、動くのもままならない。しかし小火器の開発でどんな甲冑も意味をなくし、兵士は現在のような軽装になった。小火器に当たるものは軽量のテント、衣類、食料だろう。もう少し軽いザックはできないだろうか。ほとんどの登山用品はどんどん軽量になっているのに、ザックは重くなることがあっても、背負い心地の妥協なしで軽くなることは希だ。脳味噌も含め 10g 単位の軽量化の努力を 1kg 単位で反古してくれる登山用品の重鎮だ。どんなに背負い心地のよいザックでも、重い荷物を長期間背負い続けていれば、やはり体は必ず痛くなる。荷物を軽くすると同様、気持ちよく背負うことのできるザックを選ぶことも大切だが、今ではもう十二分以上に柔らかいパッドが使われ、昔のような硬くて体を刺激するようなものはあまりない。最近共通の大きな欠点は、超重量化と荷物が入れにくくコンパクトなパッキングができないデザインになったことだろう。

大型ザック(一応 60L 以上とする)といえば、現在の日本ではほとんどインターナルフレームパックを意味する。もちろんトップローディングタイプでないものは荷物をがっちり詰められないので山向きではない。ザック本体にフレームを内蔵し、それを持たないもの(ソフトパック)より荷物をバランスよく詰めやすい。一種のソフトパックであるキスリングは、袋に背負いベルトを取りつけただけのシンプル極まりないものであり、荷をバランスよく詰め快適に背負うには熟練を要した。地形が穏やかなところでは(エクスターナル)フレームパックも用いられる。背負い子に荷物を入れる袋を取りつけたものだ。しかし狭い日本の山道ではフレームが引っかかったり、急な場所ではフレームの堅さゆえバランスを崩しやすい等の欠点から、一時のブーム以降ほとんど使われなくなった。

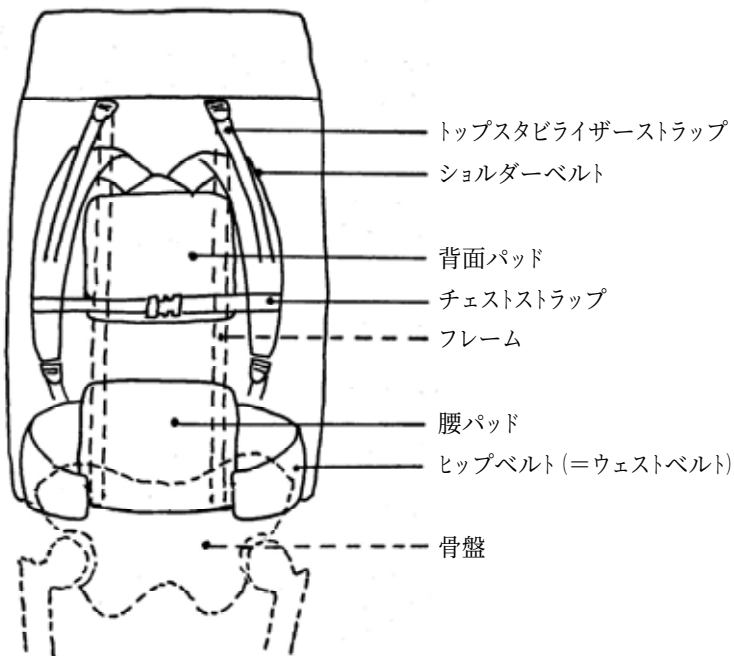
最近、GoLite 始めナイロン手提げ買い物袋にショルダーベルトを取りつけただけのような超軽量ザックが反動として出てきたが、背負い心地、容量の点で、長期縦走には向かない。よく見るとなかなか手が込んでいて、"Ray-Way"で自作するものとは天地の差がありそうだ。でも、どうせ大した荷物を入れないなら何でも同じだ。

サスペンション機構

ザックを快適に背負うためパッドを付けたり、様々な工夫がされている。

インターナルフレームパックは、67年グレック・ローがデザインしたエクスペディション・パックにその全ての源を発する。それは内蔵フレーム、背面調整機構、サスペンション機構(ショルダーベルト、チェストストラップ、トップスタビライザーストラップ、腰パッド、ヒップベルト)そしてサイドコンプレッション機構という、基本的に現在と同じ構造を持っていた。そして、83年のモデルまで背面パッドはつけられていなかった。シンプルな背面長調整機構だったので、背中はほとんどフラットになっており必要がなかったのだ。十分なサスペンション機構で肩や腰に荷重を分散するので、背中にはあまり荷重がかからない。背面部に固い物や尖った物を入れないように多少パッキングには気を使う必要があったが、厚く快適な背面パッドを持たないので重心は体に近くなり、その点は明らかに現行ザックの失った美点だ。

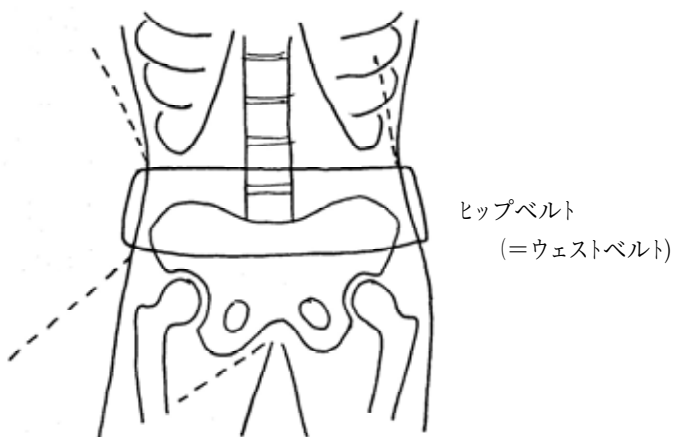
大型ザックのサスペンション機構の例を描くと、



92 年、ローのコンティニュームが発売された時、"Back Packer"誌にそれを以前のエクスペディションと比較し、747 とライト兄弟の飛行機くらい違うとのレポートが載っていたのを記憶している。しかしどちらも(エクスペディションは 77 年のトルソーラダーシステム導入のモデルだが)十二分に、かつ平行して長い間使用していた経験からは、それぞれの持ち味、長所があるだけと断言する。現在のインターナルフレームバックはどれも、エクスペディションの正当な子孫であり、基本的構造も素材もそれ以後何ら根本的改革がないのだから当然の話だ。

内蔵フレームは、布製ザックの軟らかく不安定なものに所定の形を与えるためのもの。体の動きに従って多少たわみバランスを取りやすくしている。ショルダーベルトは、ザックを構成するために袋とともに唯一の必須構成要素、一番大切なもので、チェストストラップはショルダーベルトが腕つけ根の神経を刺激しないよう内側に引っ張り、トップスタビライザーはザックの重心を体に近づけ荷重を体全体にうまく分散するためのもの。腰に荷重を分散してザックを背負うというアイデアは、厚い腰パッドにより大臀筋上部、人間の体の中で一番大きな骨である骨盤背部に荷重をかけ、パッドの入ったヒップベルトで骨盤横部を押さえることにより、肩にかかる荷重の一部を骨盤に分散しようとするものだ。そこに荷重を分散させれば背中から上の筋肉や関節に加わるストレスは大幅に減少する。骨盤に直接荷物の荷重を加えれば、ヒトが二本足歩行するようになってから大変大きなストレスの加わっている背骨に対する負荷を少なくできる利点がある。腰パッドがないと、ザックの荷重を支えるために背骨をやや丸め、その中央当たりで重さを支える必要がある。つまり荷重は主としてショルダーベルトを肩で、次に背中中央で支えることになり、常に上体を前傾させるため無駄な力がある。背中を圧迫され呼吸が苦しくなる。最近では、背面全体が一体成形的に作られるようになったためか、妙に腰パッドの薄いものが多く見られる。いつの間にか、腰パッド本来の目的や意義が忘れ去られている。それでは、肩に掛かる重さを腰に移動させるという大きな機能が果たせない。背面パッドは、背中が直接ザックの中身が触れないようにクッション性を持たせたもので、背中をより快適にするためのものだ。

人間の体は大きくなっていないのに、初期のインターナルバックと現在のものを比べるとサスペンション機構の大型化、肥大化は驚くほどだ。腰パッドは以前からしっかりしていたが、一層厚くなった。大きく変わったのはヒップベルトの幅とパッドの厚みだ。最近では幅が広すぎ脇腹に当たったり、足を上げるとぶつかったり、硬いパッドのため骨盤上部の両側の横前(いわゆる腰骨)の出っ張った部分(上前腸骨棘)を刺激するものもある。過ぎたるは及ばざるがごとしだ。



直線的なショルダーベルトは、首の横や腕つけ根内側に当たらないよう S 字型(ローでは 89 年から)に変化してきた。実際、よく使った直線状ショルダーベルトの内側フォームは、多少 S 字状になっている。しかし、ショルダーベルトに荷重が加わった時には S 字を直線状にしようとする力が働き、かつその S 字カーブが誰の体にも合うとは限らず浮き気味になることも多い。直線状のものは首の横や腕のつけ根に当たり刺激する事もあるが、一部のうまくフィットする人以外には、直線状の方が使いやすいことが多い。また、ヒップベルトとは逆にショルダーベルトはどんどん柔らかくなり、腰が落ち込むベットのよう長時間の使用には疲れるだけのものになってきた。ショルダーベルト、腰パッド、ヒップベルトのバランスは、長距離運転手向きからサンデードライバー向きに進化し続けている。

その凝ったショルダーベルトを体にうまくフィットさせるため、内蔵ステーの間隔が広くされた。ザックを背負った場合、S 字カーブショルダーの胸前面部の延長線と本体の接点の位置は、直線状ショルダーと本体の接点より広くなる。現在のロー男性用 7 インチ、女性用 6 インチそしてエクスペディションは 5 インチくらい(左右のフレーム中心間の間隔)だ。性による肩幅の差、ステーの長さの増加、上を見やすくするスペースの確保のためだろうが、S 字状のショルダーベルト同様うまくフィットする一部の人以外には、狭い間隔のもののようにショルダーベルトがチェストストラップなしでもフィットするような自由さはなくなっている。

ショルダーベルト取り付け部もカスタムの S 字ショルダーベルトをより体にフィットさせるた

め、高く離れた位置のものが多くなった。エキスペディションのように両ショルダーが中心から柔らか目のナイロンウェビングによって振り分けられていれば、肩の三次元立体形状に合わせウェビングが歪みフィットしたが、それぞれのショルダーが独立して堅いプラスチックパーツに取りつけられているものは、様々な肩の形に適應する融通性に欠けている。取り付け部の角度調整のできるものもあるが、結局、多くのものは昔の安物ザックのように融通がきかない。2本のフレームを基点としてそれぞれのショルダーが取り付けられているものも同様だ。ショルダー取り付け部の角度が肩に合わせて変わるものはグレゴリーにある。その機構は信頼性にやや不安を感じる点からも実際使用したことはないが、考え方としては正しい。しかし、やはりトップスタビライザーの幅が変わらない、ショルダー取り付け幅が変わらないので、なで肩に合わせようとするとショルダーベルトが開き、怒り肩に合わせるためにはショルダーベルトが狭くなる。S字カーブショルダーベルトと取り付け部の幅と角度を完全に固定するなら、使う人に合わせたS字カーブ、取り付け部の幅と角度、トップスタビライザーの幅にしなければならないのに、そのようなカスタム仕様は全く存在しないので結構使う人を選ぶようになった。現在でも、直線状ショルダーと幅が狭くしなやかな取り付け部の方が、はるかに融通がきき肩にフィットして背負い心地がよいと思う。小さ目、女性用のものは男性でも支障なく使えることが多いが、逆は真ならずだ。かといって、ショップオリジナルのキスリングを縦長にして生地を変えただけのようなものは時代錯誤の背負い心地で、忍耐力を培いたい人以外には向かない。

遠征に使われたことを誇り、その性能の証としているメーカーも多いが、いったい彼らがどれくらいの時間、距離を歩いているのだろうか。提供された製品を、他と比べて客観的に評価できるのだろうか。一般登山者の必要とする現実には、彼らの経験は有効性を持つのだろうか。しかし、今ではたとえ遠征に使われなくても壊れるような粗悪品はないだろう。遠征で使われたことが、自分にとって良いザックである証明にはならない。

昔、登山用品の品質が悪かった時代に頑丈だけが取り柄の軍用品、放出品が重宝されていたようだ。今でも軍に採用されていることを誇るメーカーもあるが、軍で使うのは背負い慣れない兵士が、せいぜい数日間分の装備食料を持つだけと言うことを忘れてはいけない。太平洋戦争中の帝国陸軍兵士ではないのだから、荷物を背負って長時間、長期間歩くことは殆どないだろう。ただラフに使っても壊れないだけの頑丈さを備えた、初心者でもそこそこのパッキングにまとまることだけが考えられ作られたものだ。軍用のレーション"ration"を見れば分かるように、それは殆どコンパクトさも重量も考えられていない。普通の日常生活用料理を缶詰やレトルトにただけのものだ。そこが登山用の食料、あるいはザックの求めるものとの大きな違いだ。登山用品によくある虚仮威しに過ぎない。

よほど体格の大きな人以外は、チェストストラップなしではずり落ちそうなものが多い。アメリカの雑誌、ビデオを見てもそうだから、体の大きさに合わせるためだけではなさそう。今のところ理論屋さんの考えた理論は観測結果の現実と全く合わない。ザック作りを自然科学として確立するにはまだまだ時間がかかりそう。

ローの背面長調整機構は、トルソーラダーシステム(77 年～)というナイロンの梯子状のものに日の字型の金具で長さを調整するタイプからトルソートラック(84 年～)というプラスチックレール(250mm/69g)にプラスチックプレート(80g)が付きコイン一つで無段階に調整できるタイプ、次にウェッジシステム(87 年～)という工具なしでウェッジプレート(90g)を無段階調整可能なタイプに変わってきた。そして現在は、APS(アドバンスドバララックスシステム/93 年～)という、ラダーシステムを改良した梯子状調整機構のものに変わっている。それらは全て実用上十分な調整能力を持つが、一番軽量シンプルなのはラダーシステムだ。トルソートラック用、ウェッジシステム用プレートはどちらも 15mm もの厚さを持ち、ザックの重心を体から離す欠点があった。

ヘビーなサスペンション構造になり、修理が困難になったのも大いに気になる。昔のものはミシン(グレー塗装の直線縫い職業用ミシンなら)で簡単に改造でき、出先でも修理可能なシンプルさを持っていた。今のものはパッドが厚く、プラスチック板が各所に縫い込まれてミシンも入らないようなものが多い。

現在の厚いパッドで凸凹したサスペンションつきザックを敷いて寝ことは不可能に近い。敷いて寝ると具合がよいという人は、一体どんなザックを使っているのだろうか。せいぜいザックの上に足を置いて寝ることができるくらいだ。防寒のため、濡れ防止のためシュラフをザックに入れると良いとししばしば書かれているが、生地のためごりごりして不快、そして防水加工生地のためシュラフが濡れてしまうのは明らかだ。

素材と製法の変化

現在、多くのザックは本体が 420d 程度の生地で作られ、底はナイロンの 840d 程度の生地で補強されている。ナイロンはポリエステルより直鎖状で、分子間力が強い水素結合を持っているので、繰り返しの屈曲や擦れに強いからだ。また、防水性を高めるため、厚くコーティングすると生地が堅くなり耐裂性が低くなり、一般に剥離しやすくなる。底には、防水性、耐摩耗

性が強く、低温でも堅くならず耐久性が高いターポリンが使われることもある。ターポリン "tarpaulin"とは、本来タール"Tar"を塗った防水シートである。ナイロンやポリエステル基布に、ポリ塩化ビニル"Poly Vinyl Chloride"PVC を染みこませた、表面に基布の模様が浮き出ているような軟質プラスチックシートだ。様々な厚さのものがあり、工業用に広く使われると共に、ドライバッグ、アイゼンケースやテントの補強にも使われている。昔は本体まで 840d が使われていたが、実用的な耐久性の差は感じない。生地よりウェビング等がへたってしまうことも多いからだ。しかし、厚い生地は強度が高く、ほとんど補強もせず使うことができるので一般に修理や改造が簡単だという長所がある。補強が必要で、構造が複雑になりがちだから、薄い生地を使っても軽く仕上がっていないものが多い。全 840d 製の大型ザックの生地を、全て 210d に置き換えても 300g も軽くできない。『衣類』の「糸の太さと布の重量」、『テント』の「生地」の項に生地の重量のデータと説明がある。840d を 210d にすればザックの総重量が 1/4 になるのではない。このようなミスリードを誘う宣伝に乗せられないようにするのは難しい。

また、厚い生地は自由に縫製ができず無骨なデザインになりがちだが、薄くしなやかな生地は思い通りの形に仕上げるのが可能だというメリットがある。しかし、立体的に作るため縫い目が多くなると、縫い目部は堅くなり、擦れに弱くなる。ザックは縫い目の角の部分が擦れて破れてくることが多い。しかも、平らなところのように簡単には修理出来ない。

問題なのは、デザインにこだわり、コストを下げるため縫製を合理化したため、目で見ただけではストレスポイント等がきちんと縫われているか分からないようなものが多くなっていることだ。ショルダーベルトが取れた等、とんでもないトラブルを体験したことも、目にしたこと、そして話しに聞いたこともある。絶対壊れてはいけない物は、たとえコストがかかっても目視で安全が確認できるような構造にしておくべきだろう。

また、ザックの内側は薄暗くて、なかの物が見にくくて困ることがある。アークテリクスが 05 年から採用した生地のように内側が白色になっていれば、中身が見やすく使いやすい。

Dimension Polyant 社のラミネートクロス X-Pac VX42(9.3oz、216g/m²)である。50d ポリエステル地をベースに強力ポリエステル X-Ply 糸を 420d ナイロン表生地でラミネートしたものだ。裏地との接着に極薄い(0.25mil=0.00635mm)ポリエステルフィルムが使われているので、コーティングと異なり、長く防水性が保たれる。耐水圧は 14000mm もある。

X-Pac VX21(6.2oz、144g/m²)は表生地を 210d ナイロン地にしたもので、より小型のザックに使われる。また、より薄い VX-04 は小型ザックに使用されるが、テントに使われている VX-02 の 2 倍ほどの重さになる。軽量化を狙うものは、シリコンコーティングのものを採用

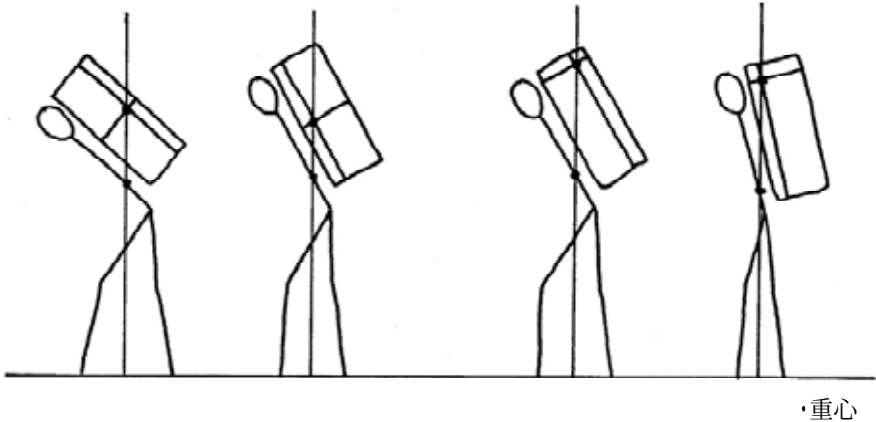
することも多くなった。『テント』の「生地」にも書いてあるので参照。ザック、テント、シュラフに使用する生地は、基本的に厚さの相違だけであるから、厳密に分けて考えられない。衣類に使われるものは、保温性、肌触りが必要とされるのでそれらとは多少異なる点もある。

以前から、カヌー用の防水バッグ、ザックは溶着技術で作られていた。背負い心地を考えない作りで、ごつい PVC 素材のものだ。しかし、溶着技術の進歩により、最近、例えば 05 年にはジャックウルフスキンから小型の、06 年にはアークテリクスから中型、大型の背負い心地を考慮した完全防水のほぼ完全に溶着製法で作られたザックが発売された。アークテリクスに使われている生地は両面ポリウレタンコーティング、本体は 2 ピースで立体的に作られている。縫い代が極少なくて良い溶着ならではだろう。縫い目、継ぎ目は生地弱点だから少ない方がいい。各社も次々開発しているようだ。部分的に溶着技術を使っているものも多くなった。近い将来、ドライバッグ並みの防水性を持つザックが当たり前になり、ザックカバーなど陳腐なものになるかも知れない。そうなると、標高が上がるに従いザックが膨らみ、途中、息抜きではなく空気抜きの休憩を取る必要がありそうだ。もちろん多少の改造も不可能になる。『衣類』の「新素材と新製法」で言及しているが、靴、ザック、テント、衣類と、接着、溶着技術が縫うことの代わりに本格的に使われ始めた。最近の製品は何でも、個人では修理したり改造したり出来ないブラックボックス化が進行している。これは個人の無力感に繋がり、現実感の喪失に繋がることだ。縫製という古代技術が使われなくなれば、最も身近な生活必需品、衣類等の縫製品までブラックボックスになり、一層「もの離れ」、「理科離れ」が進行するに違いない。

止水ジッパーの使用が多くなり、ジッパーを覆うフラップが消えれば、衣類に比べはるかにラフに使うザックでは破損が非常に心配だ。動きの渋さも大問題。手が凍えたりしたらとても使い物にならない。しかし、フラップを付けなくて良いから製造工程が楽になることだけは確かだから、この動きは止まらないだろう。『衣類』の「ジッパー」には、止水ジッパーの問題についても書いてあるから読んで欲しい。

重心

ヒトは二本足で立っている時、真っ直ぐ直立するのが一番楽で安定した姿勢だ。そこで、体の真上から荷重をかければほぼそのままの体勢で耐えられる。しかし背中にザックを背負った時は、体を前傾させなければ立ってはいられない。



体の重心(男性は足下から身長 56% 、女性は 55% くらいの位置)から水平方向に離れたところにザックがあるから、体とザックの合成重心を足底の中間部辺りにするため、つまり立っているためにそのような不自然な体勢を強いられる。そして前傾が大きくなればなるほど無駄な力が必要となる。

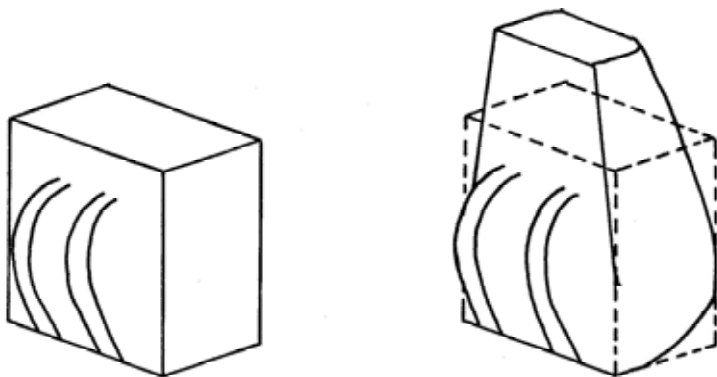
ザックの重心が体から水平方向に近いほど、体に無駄な力がかからず前傾は不要だ。ザックの重心が体の重心位置から垂直方向に高くなるほど前傾の必要は少なくなる。そこで荷物を軽く感じることになる。

つまり、ザックの重心は水平方向には体に近くそして高くがパッキングの基本原則だ。

しかしザックの重心を水平方向に体に近づけることは、どんな状態、地形でもベターだが、重心の高さに関しては問題が起こることもある。荷物の重心が高くなり体の重心から離れても平坦な地形では何の問題もないどころか、昔懐かしい尾瀬の歩荷の頭上高い荷姿を見ればその効用のほどが分かる。ほとんど体の真上から荷重を加えることになるからだ。ところが急峻な地形で手を使ってバランスを取る必要のある時は、上半身も大きく前後し、荷物の重心が体から離れるほどトルクとして体に大きな力が働きバランスを崩し危険なことになる。急峻な地形では荷物の重心を上げることによる体の負担の軽減と、重心が離れることによる不安定さのバランスを考えたパッキングが必要だ。残念ながら、山岳地帯では理想より重心を下げたパッキングにせざるを得ない。

形

車でも箱でも、荷物を積めるには角張った形のものの方が、なめらかで曲面的な形のものより使い勝手がよい。昔の大型のザックのような直方体の角張った形では、荷物は積みやすいがパッキング技術の良否によりバランスのよさ、背負いやすさに大きな違いが出た。そこで現在のザックは誰でもパッキングしやすいように、どのように荷物を無造作に放り込んでもそこそこのバランスになるような形に変化してきた。



直方体のものであれば左右のバランス、上下のバランスを考えて詰めないと、片側が重くなったり重心が低くなりすぎたり、大変背負いにくいことになる。最近のものは、例えば本体下の後ろがカットされたり左右の幅が狭くされている。しかし同容量を確保するために背が高くなった。適当にパッキングしても、左右のバランスはとれ重心も上がり背負いやすくなる。

曲面を多用したザックは形を整えやすい。四角いものは、角角にしっかり詰めないとザックが丸太のようになり大変背負いにくくなる。球はある容積を持つ立体として最小の表面積を持つものであり、一番安定した形だ。水滴や風船はいつも球形になろうとする。従って四角いザックは直方体という不安定な形を維持し、その形を整えるようなテクニックが必要になる。ところが曲面を多用したザックは、初めから安定した形、球に近い形を持っているためラフに詰めても形は整いやすい。四角いザックはラフなパッキングにより点線のように丸くなるが、曲面的であれば最初から安定した形になる。曲面的ザックはラフに詰めてもそこそこのパッキングになるという長所がある。

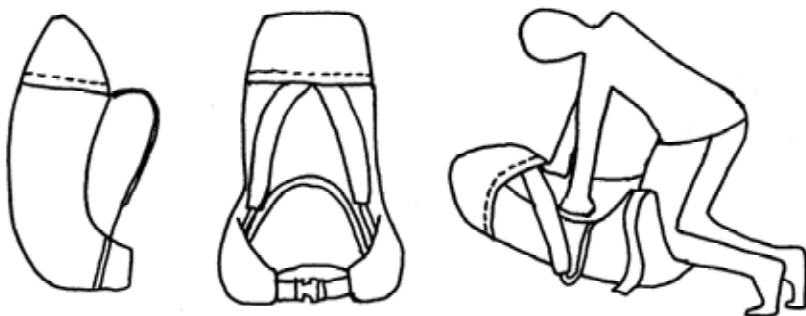


最近の多くのザックでは、旧来のパッキング技術は不要であり、適当に物を放り込み各部のストラップを締め、中で物が踊らないようにすれば問題ない。反対に、荷物をコンパクトに詰めたい場合は、曲面的デザイン故どうしてもしっかり収まらないので、表示容量に対して実際の容量は相当小さい。

背が高く曲面的なザックが困るのは、樹林のなかでのザック頭部の引っかかり、急峻なところでバランスを崩しやすいことだけではない。登山の荷物はザックの曲面のなかにぴったり納められようなものばかりではない。どうしても各部に中途半端な空間ができ、同じ容量のものを詰めるために曲面を多用したザックは、四角いものより明らかに相当大きな容積のものが必要になる。コンパクトにするため曲面に合わせて詰めることは、四角いザックに入れることより貧困な立体知覚しか持たない者にとっては困難だ。そこで冬期のように荷物の多くなる時は、四角い形(正四角柱ではない)のザックの方が圧倒的に使いやすい。正四角柱タイプは体から重心が離れる。幅を増やして、厚みを押さえたものが理想だ。実用的にはザックも、ヤマト運輸とトヨタ自動車の共同開発という四角い宅急便専用車(今では市販されている)や、02年発売された乗用車ベースではない商用専用バンのような四角いものが一番だ。

しかし、登山用大型ザックには、そのような形は時代錯誤、背負い心地無視のショップオリジナル以外に存在しない。それも、不要な部分が曲線で出来ていて、キスリングにはるかに劣る完成度だ。快適なサスペンション機構を捨て去っても、割り切り方が中途半端の、見かけ倒しの無骨さだ。大して軽くもない。昔のように、少々を生地を直線的に縫えばザックを作れる時代は過ぎ去り、様々な専用パーツ、フォーム、熱成形機や溶着機を揃え、魅力的かつ機能的で立体的なデザインがなければ、普通に売れるザックにはならない。残念ながら、日本製ザックは下手な素人の手工芸品と化したものになっている。日本特有の技術者と技能者の密な連携による、精緻な物作りの技はここには全く見られない。

むかし、むかし、ヤックパックという大型ソフトパックがあった。



フレームは一切使われておらず、外づきのサスペンション機構をほとんど持たず、ザックの形状でその役割を果たすという 80L の大きさでありながら 1.3kg の軽量さ。荷姿は、背中に動物が張りついたようで気味悪がられたくらいだ。背中のパッドもないので重心は体に近くなり、きちんと荷を積みれば現在でも最高のバランスと背負い心地。しかし途中で雨具を着たりするため荷物を出すとどうなるかは想像に難くない。ぴったり詰めた状態ではベストだが、荷物の量の変化にはからきし弱い。そして、ぬいぐるみに綿を詰めるだけならともかく、様々な形のものを詰めて形にするのはため息ものだ。出し入れのしやすさ、容量変化へのフレキシビリティの欠如から、背負った時に理想的形を持つザックは消滅した。しかし頭のじゃまにならないよう斜めにカットした上部ポケット、重心を上げ下降時もじゃまにならない切れ上がった底部、腕の動きを妨げないよう狭めた胴体中央部といったデザインは、よくよく見れば現在、多くのザックの基本的スタイルの一つとして定着していることが分かる。

二気室、つまり本体のなかに上下を仕切る布を持ち、下部は外からジッパーで開くことのできるザックが多い。固くコンパクトに詰めることをよとしてしているので、しきりを使ったことはないが、下部からものを出し入れしたことはある。だが冬期、下部を開こうとすればショベル、ピックル、ストック等を取らなければならないこと、本体を前傾させるとサスペンション機構に雪がつくこと、そしてしっかり詰めているので開けられないことなどの理由で利用したことはない。この機構は基本的にゆったり詰める人に役立つもので、重く、破損可能箇所を増し雪や汚れがつきやすく

なるだけのものだ。

ポケットは、上部フタにカメラや行動食等を入れるのに十分な大きさのものと、フタ下にスベアの地図や非常用品を入れる薄いものがあれば十分だろう。日本ブランドでは5番のジッパーを使うものが多いが、8番以上の方が手が凍えた時の使い勝手はずっとよい。U字型に開くものはスムーズに開閉できないことがあり、中身がこぼれそうになることもある。一直線かつ、ジッパー両脇に40mmくらいの引き手用ウェビングがつけられているものは、悪条件下でもっとも使いやすい。何も付いていないと、ジッパーが曲がってうまく開かないことがある。止水ジッパーは破損の可能性と開閉の重さが看過できない大きな欠点だ。本体下部の外側にポケットがつくものもあるが、底部の厚さが増し岩場でお尻が引っかけたりやすく急峻な地形には向かない。

ウェビング類はどれも十二分についており、夏にはほとんど使うことはなく重いだけ。不思議なことにどのメーカーのザックでも、わかんをすっきり取りつけられるストラップはついていない。日本ブランドのものでもそうなのは怠慢だろう。サイドコンプレッションベルトを使用して装着することになるが、片側2本のストラップで止めるにもよほど適当な位置にストラップがないとわかんはぶらぶらして具合が悪い。背中に取り付けると重心が後ろになりバランスが悪くなる。最近のザックはいろいろな点で改造しにくいと、メーカーの想定していない用途には使いにくいものとなっている。現在のものと異なり昔のザックは半製品であり、自分の使用目的に合わせ改造できるよさがあった。

キャンプ用、ベースキャンプ用、長期縦走用等々ときちんと目的を絞った物作りをしているところはなく、ほとんどがフルブルーフパッキングの万能型として作られているので、長距離輸送トラックとしてフル装備のセダンを買わざるを得ないのが紛れもない現実だ。

選び方

100円化粧品も高価な化粧品も、その成分自体はほとんど差がないといわれて久しい。それでは高価な化粧品には何を求めるのか。夢あるいはよいイメージであろう。消費者は企業が宣伝により作り上げた幻想を買い消費する。それで効果があればよいし、プラシーボでも効けばよしとする。最近その効果がないとの研究結果が発表された。しかし恥ずかしながら個人的

にはその効用を認めざるを得ない。これほどのザックも機能過剰になると、ザック選びはどの神話を信じるかといえるくらいだ。

メーカーの宣伝によって作られた伝説にパッケージされたザックを使い、勇気つけられ力を発揮できればそれも一つの性能といえる。人の感覚は、例えば自分より多少重い荷物のザックに交換しても今までのものより軽く感じるというくらいあやふやなものだから、幻想による信頼も大切かもしれない。

購入時には、店頭で少なくとも 15 ～ 20kg 詰めて背負ってみる。

その前にまず仮調整をする。ヒップベルトの幅の下から三分の二くらいの位置が、骨盤横の尖った部分にくるよう締める。その状態で、ショルダーベルト上部取り付け部が鎖骨の位置くらいからやや下になるように調整しショルダーを締める。その位置はショルダー取り付け部の構造により異なるが、多少短い(低い)のは何ら問題ないのに対し長すぎれば肩の後ろから上にかけて空間ができ非常に不具合だ。チェストストラップは乳首の上程度にする。トップスタビライザーは垂直から 10 ～ 45 ° くらいの位置になるようにする。角度が立ちすぎると肩にかかる荷重は少なくなるが、それ以上に胸を圧迫して苦痛だ。次にザックを降ろしフレームを抜いて(フレームを抜けないものは、フィッティングが困難だ)、先程ザックを背負った時のフレーム末端の位置と体の位置を基準として背骨の形に合わせてフレームを曲げ直す。フレームをザックに入れ、所定の重さを入れやっとスタートだ。

ザックを背負い、前傾してショルダーベルトに荷重がかからないようにしてからウェストベルトを所定の場所できちんと締める。そして、体を起こしショルダーベルトをしっかり締めトップスタビライザーベルトを引く。チェストストラップは、ショルダーベルトを内側に引きよせ、腕付け根下の圧迫がなく胸を刺激しない程度に締める。以上で大まかな調整は終了し、その状態でできるだけ長い時間背負い歩き各部を微調整する。変な圧迫感や痛みを感じるところがあるか確認して、どこにも問題がなければ清水の舞台から飛び降りることになる。もし今まで使っていたザックがあるならそれを持参し、荷物を詰め背負い比べると分かりやすい。

しかし困ったことに、少なくとも 2、3 日背負い続けてやっとショルダーベルトが肩にしっくりなじみ、それから入山時のセッティングと大きく変化する。ちなみに靴はほとんど変化しない。ザックの荷重は体に大きな力を加え体の形を変化させ、ザック自身も荷重により変形するのは逆に、靴は足を優しくぴったりと覆い、足の変形を防ぎ保護してくれる。荷物の荷重に対し体とザックが反応してある程度安定した状態になるには、時間が必要なのだ。そこから真のザック評価が始まる。現在はどれもショルダーベルト、ヒップベルト等に十二分以上のフォームが詰めら

れ、初めから体への当たりが一見優しくなって、逆に簡単に良否を見極めることができなくなった。EVA やポリエチレンフォーム(昔はゴムスポンジも使われた)を基層に、体側には柔らかくクッション性の高いポリウレタンフォームを使っているものが多い。何しろクッション性の高いフォームによりしばらくならどれを背負っても十二分に快適だから、登山靴を選ぶよりはるかに難しい。靴は足をその中に入れて使うもので、そのデザインは基本的に足の形によってのみ決定され変えようもないから、新しいものが悪くなることは少ない。新しいものほど、同等木型と機能を持つものは軽く柔らかくなって履きやすくなっていることが多い。しかし、ザックは体の外側につけるものだから少々遊びすぎているようだ。いかに体とザック自身にストレスをかけ、変形させているかということを忘れている。

スポンジ、フォームについては、『靴』の「軟らかい靴」で説明しているので参照して欲しい。

表示の容量はメーカー毎に異なり、メーカー間の正確な比較ができないばかりかその容量さえ正確に計られたものとは思えない。マウンテンツールズは以前からそのことを指摘、ピンポン玉を詰め容量を出していた。REI も 99 年春のカタログでは、プラスチック製のビー玉のようなものを詰め調べ表示していた。各メーカーに共通した測定法のないことは問題で、是非共通の計り方にして欲しいものだ。雑誌には、是非そのような比較記事をお願いしたい。その程度なら、優劣を比較するのではないから問題ないだろう。

店頭に飾られたザックを見ると、ザック上部を最大限に伸ばしていることが多い。標準状態以上の高さにはフレームがないので、伸ばした部分は不安定だ。現在のザックは十二分に背が高いので、そのような使用法は全くナンセンスなこと。普通の状態で比べる必要がある。少なくとも背負った時、自分の頭の高さをあまり超えないサイズのものでなければ非常にバランスが悪い。

ザックのカタログ重量も当てにならないことが多いので、店に秤がないならカードあるいは現金とともにパネ秤でも持参する必要がある。しかしザックを買う場合は重さだけで買うと大きな失敗を犯しやすい。軽量シンプルを謳うあるメーカーの 80L のザックを 2 代続けて使って、文字どおり痛い思いをしたことがある。背負いやすさはザックにとってその重量と同様以上に大切なものだから、念入りに背負いやすさ、各部をチェックし目的にあったものを選ぶ必要がある。

冬期南アルプス全山を単独縦走する場合、3 週間分プラスの食料を持つなら 80L の本体 +20L の延長部くらい、無雪期に単独で南アルプス全山往復縦走の場合 2 週間分の食料を持って 65L の本体 +15L の延長部くらいだろう。これは直方体デザインの場合だ。重量は水

なしでそれぞれ 30kg、21kg は可能だろう。それ以上はザック、カメラ等の重量物を削り、根本的にやり方を変える外なさそう。過剰な大きさは余分の装備と重量増をもたらす行動の自由を著しく阻害する。長期山行の場合、食料の割合が非常に大きくなる。出発時ぴったりの大きさのザックは、食料が減るとバランスのよいパッキングが困難になる。出発時にザックを少し伸ばしたくらいが適正だろう。現在のザックは、どれも容量調整機構が付いているので大は小を兼ねるという説は、人間は弱いものだという視点を忘れている。大きなザックがあれば、どうしても荷物を小さくするという気が起きない。それを理性で克服出来る人であれば、現在のザックは 100L のものを日帰りに使っても十分実用になるフレキシビリティを持っている。しかし冬には、ザックがシワシワになっていると雪が付いて困る。

ところで、以前"Back Packer"誌等で巨大なザックの外にものをぶら下げだらけた荷姿を見て、何てアメリカ人は手先が不器用なのだろうかと感じた。できるだけ全ての装備をザックのなかにきちんと入れなければ、引っかかったり、つけたものを落としやすい。ところが最近やっと日本人も老若男女問わずアメリカ人に追いつき、山盛り凸凹の 100L のザックで 2 泊 3 日の縦走をする人さえ見るようになった。ザックのパッキングのフルプルーフ化が不器用さを生み出したのか、不器用な人が多くなったからパッキングしやすいザックが開発されたのか興味深い問題だ。個人が工夫しなくてもそこそこ使いやすい完成度の高さ、あるいは改造の出来ない構造のザックは、本質的にザックが自分の山行の、時には喧嘩もするが仲の良い気の置けない仲間ではなく、単なる使い捨ての道具になったことを意味する。このような、一般レベルの「もの」との関係性の希薄化は、「もの」そのものへの関心を失わせることにより、精緻な物作りで世界に知られた日本の技術の底辺を大きく揺らがせつつあるのかも知れない。

基本的には、容量もサスペンション機構も大きすぎないものを選ぶことがポイントだ。大き目のサスペンション機構のものは使えたものではないが、小さなものなら問題なく使うことができる。

寸胴のものでは、ザック上部本体の口のサイズでおおよその大きさが分かる。幅 40cm、厚さ 20cm で口幅 60cm。その程度が大きさの限界だろう。コンティニュー M の口幅は 53cm、マックパックのカスケードは口幅 55cm だが、曲面的で下膨れ形状だ。幅 35cm、厚さ 20cm で口幅 55cm と、幅 32cm、厚さ 18cm で口幅 50cm くらいの寸胴タイプザックのバリエーションが欲しいが、もちろんどこにもない。現在のザックは曲面的なものばかりで使いにくい。そこで減点法で選択することになる。雪がつきにくく、引っかかりが少なく、荷物をコンパクトに詰めやすいプレーンな形（しかし多少のパッキング技術がいる）を持ち、一気室で過剰な機能が少なく（つまり軽い）、必要かつ十分なサスペンション機構を持っているもの（つまり背負い心

地がよい)を選ぶという困難な作業になる。

両ショルダーベルトの取り付け部は、V字型で中央部にあり、ショルダーベルトも狭目、その硬さは所定の重量を詰めた時に痛くない程度に硬いこと。ショルダーベルトの取り付け幅が狭くても、その取り付け位置を下げれば実際の幅は広がるの対し、広い取り付け幅のものはそれ以上に狭くはできないので体の大きさへの適応力は著しく劣る。そしてショルダーベルト下のつけ根は腰パッド横のザック底部から出ているものがよい。フレームに直接荷重が伝わり、背面長があまり変化しないので背負い心地の変化が少ない。ザック本体の横に取りつけられていると、荷物の重さによってその位置が変化し安定しない。ザックの下部にプラスチックの板を入れ、変形を防ぐように工夫しているものでもやはり変化する。

ショルダーベルトの幅は 60mm で十分だろう。それ以上は 6 フーター 200 ポンド以上の人向きだ。現在の主流である非常に厚手でクッション性の高いものは、長期間の連続使用ではソールの柔らかすぎる靴と同様かえって不安定で疲れやすい感じがする。現状のものはショルダー取り付け幅が広く、ショルダーベルトは柔らかくその幅は広く、試しに背負ってみた時には具合よく感じられるものが多い。おかしいことに、ショルダーベルト両端やウェストベルト外周がトリミングされ非常に硬く尖って体に当たるようなものもある。チェストストラップは 20mm 幅のものは疲れていたり、手が凍えていると非常に扱いにくいので 25mm のバックル使用のものではない。軽量化のためとはいえ、使い勝手からは絶対小さくしてはならない。すぐ伸びきるゴム入りの必要はない。

腰パッドは、ザックの荷重を受け止めるためショルダーベルトの次に大切なものだから十分な厚さと大きさ(妙に小さなものもある)が必要だが、ヒップベルトは最小限で十分だ。これもあまりに大きく体の動きを拘束するものが多くなっている。エクスペディションのヒップベルトは幅 90mm、コンティニュー M は取り付け部 150mm、先に行くほど細くなり先端は 100mm。マックパックのカスケードも同じくらいだが芯が入っており少々腰骨を刺激することがある。この他に何個もの大型ザックを使ったことがあるが、全て過剰な作りで体に合わず、ごつすぎて体を刺激し使いものにならなかった。90 年代始め以降ヒップベルトのフォームは厚く、予め立体的に整形されていたり外側にプラスチックの板まで入りさらにごついものになった。快適そうだが、ヒップベルトを締めるだけで骨盤の尖ったところを刺激したり、体を曲げた時その上下の角が体を刺激したりする。体脂肪率の高い人がヒップベルトをしっかり締めず、かつ平らな所を歩くようにデザインされているとしか考えられない。アメリカの有名なザックメーカーのオーナー設計者たちの体型、発言、荷姿を見るとますます疑問になる。少なくとも彼らは背負い慣れ、歩き

慣れていないように見える。どのような初心者でも、すぐ快適に背負うことができるということだけを目的に設計しているようだ。しかし、初心者以外に使いにくいようではユニバーサルデザインとはいえない。ショルダーベルト、腰パッド、ウェストベルトとその硬さ、大きさ、形状のバランスは完全にビギナー向けになっているものが多い。ヒップベルトの大きさは上記程度までで、上下につかんで柔らかく曲がり、ウェストに回しても硬さを感じないものを選ぶ必要がある。ザックにとってヒップベルトは第二義的なものだから、あまり存在感を持つべきではない。重荷になるほどヒップベルトは役立たなくなる。重荷の場合にはヒップベルトをしっかり締め、荷重を腰に移動して肩にかかる重さを少なくすることは大して期待できない。腰、ウェストという上下にストレートな形状のところは荷重を分担させるには、ヒップベルトをしびれるほど締め上げなければ不可能だからだ。腰全体に荷重を分散させ受け止めるため、しっかりしたプラスチックパネルを入れた非常に堅いものは、19世紀ヨーロッパの貴婦人のような体型を持っていない限りよいとはいえない。これは、長期間連続して背負うことを想定していないということだろう。しかし、余りに堅くなったので、体に合わせるためヒップベルトの角度調整機構を持つものもあるが、本質的解決にはならない。荷物が軽ければ肩で背負うだけで十分だ。ヒップベルトはうっとうしいだけ。肩はほぼ水平になっているので、どんな時にも嫌でもしっかり荷の重さがかかる。結局、例えば 20 kg という重さがヒップベルトの一番効率的に働く荷重で、もちろん軽い荷物の場合は不要。ヒップベルトはある程度の荷重の時だけ非常に効果があり、それ以上でもそれ以下でも効果が小さくなるので、必要最小限のものがベターということだ。剛構造のヒップベルトをしっかり締めると、体幹の動きを拘束するという欠点も忘れてはならない。

分解してみると、使われているフォームの質に大きな差があることがある。同じモデルでさえ、生産国により異なっていたり、左右ウェストベルト内のフォームの弾力性が多少違うこともあった。しかし、その違いは体感できず、実用的な耐久性の差もなかった。ウェストはかなりアバウトな感覚しか持っていないようだ。

背面パッドも完全に独立しているものは少なくなり、背中全体が一枚板のイスの背中のように一体的に作られているものが多くなった。インターナルフレームパックのフレームパック化である。マウンテンツールのザックには背面全体に立体成型されたプラスチックのフレームが入れられ、フレームだけで 600g もある。普通のアルミフレームは 2 本で 300g 弱だ。プラスチックのパネルを併用するものも多い。なお、強度の高い超々ジュラルミンであろうと、多少弱いジュラルミンであろうと、同じ反発力が欲しければ、同じ重量になる。だから、実用的性能は、テントのポールと異なり、ほぼ変わらない。07 年、扁平の中空になったフレームを採用したメーカ

ーがあるが、素材は 6063 程度の弱さなのは良いとして、曲げ直して潰れないか心配だ。左右で 100g 位軽くなっても、全体としては大した重量ではない。金属の機械的特性の説明は『テント』の「ポール」に書いてあるのでチェックして欲しい。たわみの大きさに関しては、『歩行の道具』の「ピッケル、アイゼン」、『調理器具』の「チタンコップフェル」にもある。

ローでは 92 年発売されたコンティニウム M がその走りだろう。ザック背面がユニット化され裸のナイフをそのままザックの中に入れても安心にはなったが、体の前後、左右の動きに自由に従う軟らかな背負いやすさは失われた。背面機構の複雑化、厚みによりザックの重心が体から離れバランスが悪くなった。そのような過剰な作りのものを避ければ、現在では買うものになくなってしまう。しかし、どうも大きな考え違いをしている。イスにもたれかかるのと異なりザックを背負った時は、荷物の大きな重量が歩く度、ねじれたり曲がったりする背中に加わる。そこで体の動きにフレキシブルに従うザックの柔軟性が背負いやすさの大きな要素となる。ジャンススポーツのフレームパックは、柔構造のフレーム(細いチューブを使い、壊れないけど曲がりやすいドーム『テント』の「ポール」と同様だから、参照)により体への負担が少なく、動きやすいことを売り物にしていた。サスペンション機構の剛構造化はパッキングのフルプルーフ化を進めたが、重量増と体の動きの不自由さをもたらした。背負子を使ったことのある人はよく分かるはずだ。

ちなみに、ショルダーベルト、ウェストベルトは縫い目があって生地にしわがある旧来の作りのものでも、背負い心地に全く関係なく、耐久性も全く問題ない。縫い目がほつれることは殆どないし直すことも出来る。その前にフォームがへたって使えなくなる。側生地とフォームが熱溶着で一体に作られしわのないものと比べ、美観上はともかく使用上の差はない。しわが出ないようにと熱成形して甲虫の腹のように凸凹に加工したものは、それらの角が当たって不快なくらいだ。窪みに雪が入り込んで非常に困ることもある。ニットを側生地に使っているものは糸が引っかかり穴が開きやすい上、雪が付きやすく体を濡らす。

背面にメッシュを使ったり、形状を工夫して通気性をよくして背中が蒸れないことをセールスポイントとしているものも多々あるが、背負って数分もすれば旧来のものとはほとんど違いは感じない。冬には雪がついて背中を濡らす大きな欠点を持ち、夏には小枝が刺さって背中を刺激することもある。おまけに、某社の場合、メッシュの中の非常に荒いポリウレタンフォームは、ボロボロと崩壊してしまった。ポリウレタンの崩壊については、『靴』の「軟らかい靴」で説明したので、必要なら参照願いたい。なお、メッシュ内フォームに染みこんだ汗は取り外して洗う他ない。

30L のフレームつきザックのアルミフレームとプラスチック板を取り外したら大変背負いやすくなったことがある。40 ～ 50L までのザックならフレームも大げさな背面も一切不要で、シ

ンプルなヒップベルトとチェストストラップがあれば十分だ。今まで使用した有名ブランドの高価な全てのザックがそうだった。

底部の切れ上がったものは、重心が上がり、下りでも底が引っかからないが、パッキングしようとしても、ザックを下ろし中から荷物を出そうとしても倒れてしまい使いにくい。本体下部の左右に取り付けられたポケットには、雪や泥がこびり付きどうしようもない。

近い将来は、インソールに熱を加え足裏の形にぴったりのものを作るように、背中の形にぴったり合わせたものが作られるかもしれない。宇宙船の船外作業の時、宇宙飛行士が背負っている生命維持装置、ライフサポートバックパック"life-support backpack"のようなものに必要な荷重を詰め、ショルダーベルト、背中そしてヒップベルトを一体として熱でプレス整形できれば最高に体にフィットしたものができただろう。しかし衣類を重ね着しても大丈夫だろうか。動けるだろうか。パッキング宮殿の衛兵のように、背筋をピンと伸ばして歩かなければならないとしたら肩が凝りそうだ。05 年からオスプレーが、熱成形のウェストベルトを使い始めている。

最後に、ザックはテントやシュラフのようによく考えて選べばいいものを見つけることができるという状況はどうに通り越し、バロック化極まっている。工夫に工夫を重ねたインターナルフレームパックは、殆どフレームの露出していないだけの軟らか目のフレームパックになり、ラフな収納には強くても、コンパクトな収納としなやかな背負い心地は失われた。その様な剛構造化したザックを個人の体に合わせるため、厚いパッド、ショルダーベルトの S 字状化等の試みをして、旧来の柔構造のしなやかでフレキシビリティのある背負い心地ではない。もちろん、ショルダー、ウェストベルト等々完全にカスタマイズすれば相当改善されるだろうが、それでも剛的背負い心地は長期間使用において体を疲れさせるだけのものだ。ザックは背負うものではなく、着るものだというのなら、出来るだけしなやかなザックにする必要がある筈だ。少なくとも、長期間の連続使用にはそうする必要がある。どんなにフィットして気に入ったジーンズでも、長い時間着続けるとあの生地 of 堅さが体に負担なのと同様だ。それを批判した日本ブランド一部のシンプルザックは、これまで築き上げられた背負いやすさのための工夫をほとんど全て無視している。軽いという特徴でもなければとても商品とはいえないものだが、あまりに複雑化、重量化したザックに飽き飽きした人に売られているようだ。しかし、全くの初心者が何も考えずパッキングするのでなければ、あまりに初心者 to 阿ることをしなければ、シンプルな形の詰めやすく、背負い心地がよく軽いザックを作ることができるはずだ。

それにしても、日本ブランドのザックはどれも価格だけで勝負しようとしているものが多い。最

高のものを作るには、不自由を我慢することをよしとする日本の悪しき精神主義が邪魔をしているのかも知れない。

現用の自作ザック

夏はマックパックのカスケード(85L/2.6kg/99年までのモデル、00年からはサスペンション機構が一変した)を使用していた。例外的に適切な硬さと幅を持つショルダーベルトが気に入って購入した。生地はコットンとポリエステルを緻密に織りワックスを浸透させた非常にこつものだ。生地自身は防水で水を吸わないが、撥水性はなく縫い目からの漏水がありザックカバーは絶対必要。以前、ザックカバーを持参せず、ザックの中が水浸しになったことがあった。多くの欠点はあるが、多少プレーンなデザインと軽量さも評価した。背負いやすさ自身はローよりやや劣る。もちろん、底は耐摩耗性のよいナイロン製だ。残念ながら、生地自身はとにかくザックのトータルとしての耐久性は並だった。

冬に使用していた太古のロー・エクスペディションは腰にパッドを追加、背面パッド取り付け、雨蓋は可動式にしポケット追加、本体上部を延長して、各種ストラップをつけ全バックル、ウェビング新調等大改造後の状態で2.5kg。生地は厚く耐久性も高い。アメリカ製としては異例、今だ防水コーティングのべたつきもない。厚い生地は耐久性が魅力ではなく、修理改造が容易な(薄い生地に直接何かを縫いつければ破れやすい。その前に、生地の弱さをカバーするため補強した構造になっており改造を受けつけない)ことが魅力だ。背面構造はシンプルなため重心は体に近くなり背負いやすい。冬期の手がかじかんだ状態でのパッキングでは、その四角い寸胴の形のため非常に使いやすい。サルより三本毛が多いというヒトにとって、その程度のものをバランスよくパッキングすることは簡単だ。初飛行以来半世紀、北爆で有名なB-52爆撃機と同様、改修、改造を重ね気力、体力が続けば今後何十年も使うことになるかもしれないと思っていた。

98/99年にかけての冬期南アルプス全山縦走時、ロー・スペシャリストIIのウェッジプレートがトラブルを起こした。何とか修理できたが、途中また何時壊れるか不安で仕方なかった。下山後直したものの、以後どうしても使う気になれない。プラスチックパーツは修理できず交換する外ない。それまでも、使用するザックはほとんど全ての主要部分を縫い直していたが、さらに念入りにしっかり偏執的に縫い直し、万が一のトラブルも起こらないようにするようになった。他の全ての縫製品も同様だ。しかしプラスチックパーツのトラブルはどうしようもない。そこで99/00

年の冬期全山縦走からは大昔のエクスペディションを引っ張り出し大改造して使うようになった。驚いたことにコンティニュー M やスペシャリスト II より背負いやすく使いやすい。大改造したとはいえ、一体ザックは本当に進歩したのか疑問になってしまった。

スペシャリスト II はエクスペディションにごついサスペンションシステムをつけ、多少形を丸くし、ストラップ類を十二分につけて背を高くしたものだ。生地を薄くして重量増を防いで 3600 g と、エクスペディションの 1.5 倍。冬期にはエクスペディションと同様の寸胴型で使いやすい。コンティニュー M は立体的で上部が細く、さらにごついサスペンション機構がついている。パッドの厚みで重心が体から離れるのを感じる。このモデル以降、生地取りが複雑になり修理改造は困難になった。またあまりにも快適でごついサスペンション機構は、その重さだけでなく雪がつきやすいという欠点もある。エクスペディションの毛羽立ったナイロン地は傷が目立ちにくい雪がつきやすく、冬用としてはつりとした生地がよい。

ところで、ローのウェッジプレート付きの大型ザックは今まで 6 個使った。不思議なことにザックの容量に応じた硬さ、長さ、幅のショルダーベルトがついていなかった。取り替えたりショルダーベルトを短縮したりして使用した。アメリカのバックパッカーの写真を見ると巨大なザックの割には軽そうで、そのような人たちを対象としたものだからショルダーベルトの硬さなど大した問題ではないのかもしれない。重荷の場合は必要以上に柔かいショルダーベルトを使うとかえって肩の一部に荷重が集中する。柔らかすぎるベッドのようなものだろう。荷重に応じた硬さが必要なのだ。他のメーカーのものを見ても、容量に関わらず同じ硬さのショルダーベルトがついているものが多い。

某日本ブランドの 80L ザックは先々代が柔らかすぎのショルダーベルト、小さいが妙に芯を感じるヒップベルトと小さくほとんどパッドの入っていない腰パッドを持っていたが、99 年からのモデルはまた全く違った感じになり基本的形状さえ変えられた。03 年からのモデルはまたすっかり 0 からの旅立ち。軽量さを売り物にしていたにもかかわらず、一般的な重さになったことには口を閉ざしている。07 年からはまた軽くなったが、背面長の調整機構が省かれ、やはりショルダーは柔らかすぎ、腰パッドは薄すぎる。バックルを 20mm にし、フタのジッパーを止水ジッパーにしたので使い勝手は著しく悪くなった。混迷を極めていとしか言えない。しかし欧米ブランドのものは、同一ブランドであれば基本的にいつまでも同様な形、背負い心地を持ち、ザック作りの思想、ポリシーをもっているようだ。そういう安定性は好き嫌いは抜きにして大切なことである。そうすることによってのみ、改善されることも多いはずだ。

一流ブランド足らんとするなら、逆説的にいって欠点を直してはいけない。欠点と表裏一体

の長所を伸ばし続けることが、信頼に繋がるのではなからうか。「タデ食う虫も好き好き」、「欠点は愛される」。いつも基本的には同じだという安心感が、安定したファンを生み、時間をかけ、その存在が一般に認知され「名誉ある地位を占め」る、つまり一流ブランドとして認知されるのである。頻繁なモデルチェンジは信頼を失いやすいので、物作りは最初から高い理想とポリシーの元、取り組まないと、いつまでもボタンの掛け違いは直らない。思想のないフルラインナップを生産コストの安い国で作り展開して、その一部が売れただけで利益が出るから、本当に良いものを作ろうとする意欲を失ってしまったのだろうか。

実は、04年の夏から自作のザックを使っている。基本的には、冬に使っていたロー・エクスぺディションを現代化、必要十分なサスペンション機構を持ったものだ。大きさの相違により、夏用 2.3kg、冬用 2.5kg になった。構造、材質とも、これまで書いてきた理想の物とほぼ同じで、本体の底、体と反対側の角だけ丸くした。ごつく厚い生地を使っても布製品だから、中身を入れればそこそこ丸くなる。本体は3ピースの生地で出来ている。フタはどのメーカーも苦労しているように、立体的に作らないと本体にきちんと乗らないし、押さえが効かない。よく見るとこの部分だけは、どのメーカーのものも不細工だ。そこで、高価な市販ザックよりスマートで、ふたを閉じれば本体と一体化、荷物が安定する形を考えた。荷物を詰めた本体を厳密に実測してサイズを設定した。ポケットの下の本体をぐりぐりと取り巻くスカートは、立体的になるよう苦労した。本体の上にフタがしっかり固定され、本体としっかり馴染むものは少ない。横から見て、本体と接する部分は軽く凹状のアールを付け、本体の荷物をしっくり押さえ、安定するようにした。プレーンなデザインだから、フタのポケットは他に例のない完全2段構造にして、底には平らなポケットも付けた。これで使い勝手がよくなる。フタ最上部の前後部分は角を取り、スマートにした。フタと一体化したザックは、全体に凸凹がなく極めてプレーンだから非常に雪が付きにくい。市販のものはどれも妙に凸凹して、付いた雪を払うだけでも大変だ。極めてシンプルながら、フタだけは市販品にも類がない量産不可能なほど凝った作りにした。

問題はサスペンション機構だった。フレームは取り外し式で、ジュラルミンの25mm幅、66cm長の2本を、背中部分に縫いつけたナイロンウェビングの中に入れ、25mm刻みで背面長を調整できるようにした。シンプルな背面調整機構は、厚みが少なく、重心が体に近くなり非常にバランスがよい。ショルダーベルト、腰パッド、ウェストベルトは、ベースに15mm厚の高品質ポリオレフィン"polyolefins"独立気泡フォーム(密度0.054)、体側の腰パッドは立体的にカットした30mm厚、ウェストベルトは20mm厚のポリウレタンフォーム(密度0.03)を接着したものを、420d防水ナイロン地に包み本体に取り付けたが、適当な硬さのフォームを選択、入

手したり、カットするのは至難だった。それらとウェビングは、簡単に交換できるよう工夫してある。腰パッド、ウェストベルトの体側は、ざらついた生地にしようかとも考えたが、雪付きで苦勞することを考え、多少滑りやすいつるとした生地にした。使ってみて、それでまあ支障ないことが分かり安心した。本体がほぼ完全な直方体でも、フレームとフォームによる十分なサスペンション機構があれば、問題なく体にフィットして背負いやすい。そして、後から山行中の写真を見ていて、正しくこれは我々にとってのライフサポートバックパック"life-support backpack"だと気づいた。宇宙飛行士の生命維持装置に適度なサスペンションを付け、色を付けただけかのように見えたからだ。

もちろん、全体が 840d、底部は二重にして、フタの内側は明るい 30d ナイロン防水地を全面に張った。黒いザックの内側は闇夜のようなからだ。本体内側は重量増を嫌い諦めた。

様々なトラブルを経験したり、見てきたので、大きな力のかかるところは全ての部分の縫い目が目視で確認できること、修理が簡単なことを最重要視したデザインだ。これは、手持ちのミシンの能力から必要なことだった。

04 年の夏以降、使用している。始めて使う時は、さすがに不安で不安でならなかった。改良は隅々まで、力がかかるところでも散々やってきているのに、0 から作った経験がないからだ。大量に買えば一桁以上低い単価で買えるが、少量故小売価格で材料を調達しなければならない。トータルで高級ザック並みのコストになり、材料入手の苦勞、数ヶ月の製作期間をかけて、うまく作れなかったらもう立ち直れない。しかし、親馬鹿といわれようと、これまでで最高の詰めやすさ、背負いやすさと確認でき、気が抜けるくらいホッとした。

ところで自作に入る前、まず、幾つかのメーカーにザックをオーダー出来ないか尋ねたが、どこも面倒な注文を受け付けてくれなかった。一ヶ所だけ受け付けてくれて喜んだのもつかの間、話が進み、こちらの希望を書いた細かな仕様を送ったところ連絡を絶ってしまった。希望を送れと言うことなので送ったのに、不親切極まりない大規模登山用品店で一部の大型ザックを個人的に OEM 生産しているところだ。そこまで出来ないなら、出来ないと言いつてくれればいいのに、不快感が残っている。欧米のメーカーなら、交渉で相当の事までしてくれる。可能なオーダー内容も明示している。何から何まで、日本は日本であると痛感した次第だ。

自作しようという蛮勇が出るほど、大型ザックには長期縦走向きのよいものがない。でも、二度とこんな苦勞はしたくない。こんな気になったのは、冬と夏に使っていた大型ザックが非常に消耗していることにふと気づいたのがきっかけだ。いつも見ていると、変化を感じられないことはよ

くある。昔の写真を見て、始めて移ろいを実感するのと同様だ。部屋にはまだ何個も作れるくらいの材料が、疾風怒濤の頃の思い出として積み上げられている。

日帰り用ザック

夏であれば 20L 冬であれば 30L で十分だろう。トップローディングタイプではなく、町で使いやすいパネルローディングタイプも十分使いやすい。

このような小型ザックにも過剰なサスペンション機構がつき、重く、背負いにくくそして高価になっているが、シンプルで背面長が大きすぎないものが背負いやすい。小さな背面長のものは何の問題もなく使用可能だが、大きすぎるものはとても使えたものではない。フレームは不要で、細く適当な硬さのショルダーベルト、シンプルなチェストストラップ、ウェストベルトのものを選べばよい。壊れる心配のなさそうな縫製のものであれば一番安物でいいということになる。このような小容量のものの生地は薄くても問題ない。小さなサイズのザックも立派なものを含め何個も買ったが、結局シンプルなものを使いやすい。高価で凝った作りのものは、どれもカメラザックのようなよそよそしい背負い心地で、体になじまなく一つとして使いものにならなかった。現在一番使いやすく気に入っているものは、さかいやスポーツオリジナルの 800 円のもの(20L と 30L)である。

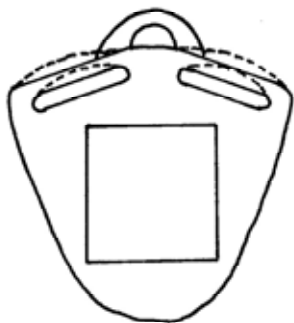
なお、小屋泊まりであれば 30 ～ 40L くらいまでだろうか。

最近では、コットン帆布を使った大昔デザインの手作り高価格ザックが販売されている。このようなものでも、生地が水を吸い雪がつきやすく、カビないよう手入れが必要なこと以外、日帰りであれば現在でも全く支障なく使うことができる程、ザックには進歩がない。

プラスチックパーツ

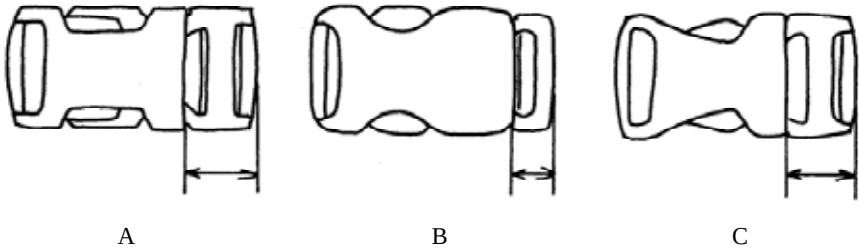
ザックにもバックル等様々なプラスチックパーツが使われており、プラブーツの突然破壊の問題以降、不安を覚えるようになった。しかし、ザックに使われているプラスチックパーツの突然破壊は、メーカーに尋ねても自らの経験でもなさそうだから、今の所安心して。見えないところにもプラスチック板が入れられていることも多い。そして、プラパーツが多用されるようになり、ザックの改造修理はより困難になった。

ウェッジプレートは使用につれ変形してくる。ウェッジプレートのショルダーベルト取り付け部が点線のように変形してくるのだ。このように軟らかいプラスチックはどれも変形してくる。だから、プラパーツの突然破壊が心配になる。ラダーロックやバックルは使っていると日に焼け、黒い色が白っぽく変色してくるので不安が募る。靴と同様、使用中ザックのプラパーツが破壊したらと考えると正夢になりそうで考えないようにしている。宝くじが当たったらどうしようと心配していても、いつも 300 円しか当たらないので、そのような心配は取り越し苦労との説もあるが。欧米ブランドのプラパーツでは、10 年以上も前から製造年月が入っているものが多いのに、日本ブランドのものには何も記されていないのがこの国の常態であろう。



プラパーツを使用しない昔のラダーシステムは必要十分な調整機構を持ち、万が一の故障（は考えられないが）でも出先で縫って修理可能だ。以前販売されていた、シュイナードのエクスペディションソーイングセットの中のたこ糸と太い針を使えば、どんなに厚い生地でも縫うことができる。しかしプラパーツが突然破損すれば一切修理不能。少なくとも山行中の修理は不可能だ。壊れにくいことと同様、簡単に修理できることがその機能とともに全ての登山用装備選択の最重要ポイントの一つだろう。

ここ何年も、明らかに使い勝手の悪くなっているパーツがある。サイドリリースのプラスチックバックルだ。



プラスチック製バックルは、70 年代中旬に押しボタンのようなプッシュ式が発売され(ロー・エクスペディションで始めて使われたプラスチックパーツ)、すぐ使いやすい上下(左右)を押す現行タイプになった。金具のプラスチック化はナイロンウェビングの消耗を防ぎ操作性をよくした。主としてポリアセタール樹脂、次にナイロン樹脂で作られることが多い。ポリアセタール樹脂(密度 1.41/商標としてはデルリン、ジュラコン/焼くと、ホルマリン臭がする)は、金属に一番近い感じのかっちりしたタッチ(ヤング率が高いことだが、説明は『テント』の「ポール」の項にある)で耐久性がある。スキーやアイゼンのビンディング等に使われる。ナイロン樹脂(密度 1.14/商標としてはザイテル)は、柔らかく耐衝撃性は高いがバネ性は失われやすい。山用としては、ポリアセタール樹脂のようにかっちり感のある方が使いやすい。

強度が鋼に匹敵するナイロン繊維も、ヤング率は 2 桁小さい値しか持たない。強いが、フニャフニャ伸びると表現すればよいだろう。金属はその強度が高いことと共にヤング率の高さに大きな特徴のある材料だ。『繊維』の「新素材と新製法」も参照して欲しい。バックルに使われているナイロン樹脂は、ナイロン繊維と異なり高分子が一方方向に並んでいないので、強度は繊維より一桁低い。しかし、ヤング率はほぼ同じだから、断面形状を大きくして強度を稼げば、金属の代用になる強度を持ち、バネ感のあるものが作れるわけだ。なお、ポリアセタールはエンジニアリングプラスチックの中で一番高性能だが、繊維には出来ない。

A のモデルは、以前は全てのザックに使われ現在もそれを選択しているメーカーもある。今もアフターマーケットはほとんどこれだ。B モデルは A と比べ材質が軟らかく全てのところが丸っこい。現代的デザインになったようだが、残念ながらヒトの手先の感覚、手の構造は人類の誕生以来全く変わっていない。町用としては問題ないだろうが、疲れ、凍え、厚い手袋をはめた手では、リリースするため左右(上下)のボタンの位置を探すにもあまりの手触りのよさ丸っこさのため困難で、ボタンのタッチも軟らかすぎはっきりせずイライラする。ストラップの長さ調整部

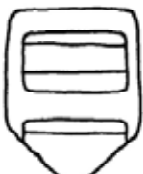
は短く持ちにくく、本体にはめる時大変扱いにくい。CはAを全体に丸くしたタイプ。目にやさしく手にやさしいデザインはホールド感を弱め、リリースボタンは奥まったところにあることもあり大変押しにくい。全体がBほどではないが柔らかく、ボタンのタッチもAほどはつきりしない。Cにはほとんど見かけは同じでももう少し角張ったものもある。手触りのやさしさより掴みやすさやタッチの明確さが必要なタフな道具として使用されるものに、デリケートな柔らかさは全くふさわしくないものだ。BとCは所定のところではなく違うところに爪が入ってしまい焦ることもある。細部が微妙に変更され、見かけはそっくりでも互換性のないものもある。簡単に交換できるものならともかく、A以外のバックルを使用したものは、シビアな状況では使いにくい。たぶん山用としての需要が町用バッグに使用する需要よりはるかに少なく、より町用にふさわしいものに進化したのではないかとの疑念を禁じ得ない。それに山用ザックまで引きずられている。なお、20mmまでのサイズ(例えばNifcoのAタイプは6.8g/a)は壊れやすく操作しにくいので25mmサイズ(同14.8g/a)に変えるべきだろう。20mmまでのサイズはバックル内に雪が詰まり、凍結して操作できなくなる事もあるが、25mm以上のサイズではその危険は少ない。軽量化のためとはいえ、小型バックルを採用するザックを作るメーカーは、シビアな条件を全く考えていない。このような操作性に影響する部分の小型化は、ヒトの手が小さくならない限り大きく使い勝手を悪くする。この他にも様々なデザインのものが使われるようになってきているが、初期モデルが一番使いやすい。

これらプラスチックパーツは大きく分けてITW社"Illinois Tool Works"(商標としてはFastex等)とNational Molding社(商標としてはDuraflex等)の二系列があり、日本のNifcoはITW系列だ。Kifcoは韓国の、Tifcoは台湾の、Nifco子会社である。

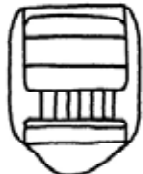
ラダーロックには、妙にロックがきつく長さの調節のしにくいものもある。初期からあるモデルは多少ゆるむが、調整しやすく現在でもベターだ。ザックを背負っている時にも時々ショルダーベルトの長さを微調整すると疲労が少ない。ゆるみにくく調整しにくいタイプを採用したものは、微調整できず困る。ウェビングが濡れたり凍ったり、あるいはしばらく使ってウェビングに止め癖がついたりすればぴくりとも動かない。肩痛は、ショルダーベルトの長さの不揃いが原因な事も多い。ウェビングの長さが分かるように、数cm置きに糸で目印を付けておくと便利だ。初期のタイプの引っかかりを奥に引っ込めたものは、手がかりがなくシビアなところで全く使いにくい。これもシビアなコンディションには、初期のタイプがよいと断言する。懐古趣味でも、よいインディアンは死んだインディアンだけだという猛々しい勝手な論理でもない。もちろん"retrogrouch"でもない。昼は新しい方がよいと思う。



手がかりのないタイプ



調整にくいタイプ



初期タイプ

コードロックのアフターマーケットでの販売は安定しない。市販されている様々なものにはそれにふさわしいコードロックが使われている。どのタイプも安定して販売されているようだが、アフターマーケットではその時々々に2、3種のものが販売されているだけだ。その構成もどんどん変わり、ある時ふんだんにあってもしばらくすると二度と姿を見せなくなる。そこで、修理改良のため新しいタイプが出る度に十分な量を仕入れておくことになり大量、多種のコードロックを在庫することとなった。内部のスプリングは金属のものの固定力、耐久性が高い。昔のものは錆びてしまうものが多かったが、今では錆びないスプリングが使われている。全てプラスチックのものはアゴヒモ固定用など、軽い操作性が求められるところに使用する。ザック本体上部のコードロックは消耗が激しい。大型で円筒形の角張ったものがもっとも使いやすいが、使用目的に合わせた形、大きさのものを選ぶ。例えば、大きな円筒タイプはしっかり固定できるが片手で操作できず、球形タイプは片手で扱いやすくオーバー手袋、フードの調整用に便利だ。帽子の顎ひもには小さな円筒形の全プラスチック製が肌にやさしく、タッチが軟らかくてよい。バックルと異なり、中に雪が入って凍ったりしても、数回押せば問題なく使うことが出来るので安心だ。



ザックカバー

防水加工された生地を使ったザックでも雨の日には中身が濡れてくる。ザックカバーを使えば、多少濡れを防ぐことができる。これまで、某有名日本ブランドのザックカバーをサイズ違い色違いで何個も使っていた。しかし、何年後かに全て、コーティングがベタベタになってしまった。交換すると言われたが、もう使うつもりがなかったので遠慮した。ヘリテイジしか作っていないようだが、30dの生地のもは80L/110g(先記70dのもは80L/200g)。より軽くコンパクトで実用的な耐久性はほぼ同じだ。「素材と製法の変化」で書いたような完全防水のザックが普通になればザックカバーは過去の遺物になろう。

ザックより大きいものは風をはらみ飛びやすいので、ぴったりのものがよい。風で飛ばないように、上部には止めがつき周辺はゴムで止めるタイプが普通だ。それでも強風時にはザックから外れてしまうので、両側下部にゴムを縫いつけザック下部横に結ぶようにした。

残念ながらザックの背中の濡れを防ぐことはできない。内側に防水の袋を入れればザックの防水は完全だといっても、それではパッキングしにくく普通は不要だろう。ザック自体もぐしょ濡れになる。

冬期に使用すればザックへの雪の付着を少なくすることができるが、ザックの使い勝手が悪くなるので使用していない。強風の時は、風をはらんで危険なこともある。最近、ザックカバーを直そうとしていて遭難したというニュースをしばしば聞かすが、強風時には危険極まりないものだ。そこで、02/03年の冬期全山ではザック上部をすっぽりと覆うカバー(30d/60g)を作った。脱着は簡単にできるように工夫した。風にもばたつかず、樹林帯の通過にも雪の付着が少なくザックカバーよりはるかに使いやすく効果的だった。しかし、自作ザックは雪が付きにくい極めてプレーンなデザインだから、それも全く不要になった。

手入れ

汚れたところは濡れタオルで拭きとるが、防水コーティングを痛めるので洗ってはいけない。汗で濡れたサスペンション部も濡れタオルできれいに拭き取る。パッドのなかのフォームを取り外すことができれば取り外して洗う。できる限り分解すれば作業しやすく、ザックのトラブルを発見しやすい。アルミのフレームを入れたままでは、アルマイト加工がしてあっても錆びてしまう。ヘビーなサスペンションシステムはその内部まで乾かすのに驚くほど時間がかかる。たとえ日に干しても、ちょっとやそつとではパッドの重なり合った内側まで乾かない。外せるものは全て外し

陰干しにしても靴同様、完全に乾くには二週間もかかるほどだ。

使用していると、ナイロンウェビングはラダーロック等に擦れる部分を中心にヨレヨレになり、動きが渋くなる。使用しない時はウェビングを外し、できるだけ癖を取るようにすると長持ちする。山行後、ウェビングに水を付けしごいて、悪い癖を取っておくと良い。ザックの寿命は、ウェビングがへたった時点と考えるくらいだ。もちろんウェビングは交換可能なものもある。

スタッフバック

全ての人にもっとも普及している山道具の一つに、スーパーのレジ袋がある。どの天場でもたぶん小屋のなかでも、あのパリパリ音が一番気持ちを苛立たせる騒音公害だ。よく同じようなレジ袋ばかりで荷物を分類できるものだと感心するし、人のものと間違えないものだ。スーパーのレジ袋として使われるくらいだから、ある点では強いが簡単に穴が開いたりする弱さもあり今ひとつ信頼感に欠ける。そこで、基本的にはスーパーのポリエチレン製パリパリ袋(0.03mm厚)は使用していない。美意識いや耳意識の問題、信頼性そして他人と区別したいという俗物根性の三位一体のなせる技だ。

ポリエチレンレジ袋、サイズ 50(周長 100cm) : 1 枚 13g

サイズ 45(周長 90cm) : 1 枚 9g(普通の大型)

荷物は分類してザックに入れる。バラバラに入れば必要なものを出すことも難しい。そのため、防水加工生地で作られた袋を使う。それをザックに詰めれば、出し入れやテント内の整理が楽になる。スタッフバックの数が増えるとその重さも馬鹿にならない。市販のものは 70d くらいのナイロン生地で作られたものが多い。様々なサイズ、色のものが販売されている。バイレスの例を取れば、

容量(L)	直径(cm)	高さ(cm)	重量(g)
20	23.3	53.0	76
15	20.0	52.0	55
6	17.2	32.5	42
3	14.3	24.0	30

それらを使えば簡単に 0.5kg は増えてしまう。そこで各サイズのものを 30d の生地で作った。30d のナイロン防水地は無造作に岩の上に置くと擦れ、小さな穴が開くので扱いは丁寧にした方がよい。しかし、滑りがよい生地だからザック内で動きやすく隙間にうまく収まるので使い勝手がよい。さらにドローコードに 2mm のもの、コードロックも小型のものを使用する(ところにより省略)ことにより、スタッフバック重量を半減させた。地面の上に無造作に放り投げるという自由は失われたがそれで十分だ。夏のピストン用ザックも 30d 生地で製作(8L/70g)、ピストン時以外はスタッフバッグとして使用している。

なお、大きなサイズのものは、太さそのままバイレスより細長い、物を入れてもザックの幅より長いくらいの形のもののほうが、ザックのなかでの収まりがよい。

日本ブランドのものはシームテープ加工してあるものもあるが、それで防水性は多少上がるもののしばらくで剥がれてくる。結局プラスチック袋の助けなしでは満足できる完全な防水性は得られない。カヌー用の頑丈で完全防水のものは重く、そこまでの必要はない。

スタッフバッグには一杯ものを詰めてはいけない。内容量の 60 ～ 70 % くらいにゆったり詰めれば、ザックのなかに入れてもそれぞれが変形しお互いの間に無駄なスペースも生じずびったり収まる。一升瓶を何本もザックに詰めれば、ザックのなかに無駄な空間が生ずるのは当たり前で、固く詰めたスタッフバッグは一升瓶と同じようなものだからだ。逃げ場がないほど堅くすると動きが取れなく、無駄が増すだけだ。社会も何も、多少ゆるく作っておかないと相互にギスギスするだけで、全く詰まらない。しかし、小さな袋に入れなければ巨大に膨らんでしまう羽毛シュラフだけは、そこそこ堅く詰めておかないとザックに入らなくなってしまう唯一の例外だ。『シュラフ』の「スタッフバッグ」参照。最後に、『テント』の「生地」や『シュラフ』の「スタッフバッグ」で書いた如く、シリコン防水地は滑りやすく使いにくい欠点があるが、最近では市販品も増えてきた。

防水の必要なものにはスタッフバッグより一回り大きいプラスチックの袋つまりポリエチレン製の袋に入れ、それをスタッフバッグに入れる。ポリエチレンの袋は 0.03mm 厚のものがよく、それ以下は弱い。着替えなどは、個別にさらにポリエチレン 0.01mm 厚(半透明のものが強い)の小さな薄い袋に入れておけばほぼ完璧だ。しかし、テントを収納すると砂や小石でプラスチックの袋は簡単に穴が空く。『シュラフ』の「スタッフバッグ」に記してあるモンベル・アクアベル(38 × 65cm/77g)にでも入れると良い。当然だが、防水透湿性素材はスタッフバッグには全く

向かない。内と外との水蒸気圧の差で透湿作用が得られるのだから、例えば、標高の低いところに下り外が暖かくなるとスタッフバッグの中に湿気が入ってくる。百害あって一利なしと断言できる。

なおザックを背負う時は、もしマナーに厳しい先輩がいなければ、斜面に置き両肩をショルダーベルトに入れた状態から立ち上がった方が、ショルダーを持ちエイヤーとばかりに背負い上げるよりもはるかに楽だ。ザックにかかるストレスも少なくなる。

